

Title	伊木寿一先生の訃
Sub Title	Necrology : Dr. Hisaichi IGI
Author	清水, 順三(Shimizu, Junzo) 高橋, 正彦(Takahashi, Masahiko) 河北, 展生(Kawakita, Nobuo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1971
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.43, No.4 (1971. 5) ,p.129(649)- 134(654)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19710500-0129

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

伊木寿一先生の訃

昭和四十五年十一月二十八日午前二時四十五分、文学博士伊木寿一先生が逝去せられた。享年八十七才である。同夜、自宅において仏式によりお通夜を、翌二十九日（日）御家族、近親者の手により密葬がいとなまれ、十二月六日（日）午後一時より青山斎場にて葬儀、二時より三時まで告別式がおこなわれた。会葬者多く盛儀であった。三田史学会を代表して清水潤三が左の弔詞を読んだ。

弔詞

伊木寿一先生の御靈前に謹しみて申上げます。先生が慶應義塾大学で講義をおもちになつたのは明治四十四年のことと聞いております。以来今日まで六〇年、史学科の特に私ども国史専攻のすべての学生は先生のお世話になりました。

慶應義塾大学の史学科ならびに三田史学会が今日の姿をもちえましたのも、先生のお力によるところが大であることも多言を要しないところであります。

長い間色々とありがとうございました。

本当にありがとうございました。

先生はいつも穏やかなまなざしで学生に接せられ、学生は慈父の思いで先生をおしたいして参りました。この長い長い年月の間に先生のお怒りになつたお顔をみたものはかつて一人もなかつたのであります。

極暑でもきちんと上着をつけられ、背筋をすつきりと伸ばされて端然たる御姿の先生を私共がふたたびみることは出来

なくなりました。先生は教室でも、学校への往復でも、古文書の調査研究の折も、壮者をしのぐ若々しさで私共、教え子に古文書のおもしろさと、その学問の深遠なることを教えて下さいました。先生のお力らで慶應義塾にも数多くの古文書を収蔵することが出来ました。

先生のお教えをうけて古文書をいくらかよめるようになつたものも少くございません。先生の切り開かれた学問の道をより発展させ、すぐれたものにすることが私共、後進の義務だと存じます。

伊木先生、非力な私共に、どうか御力を与えられんことを

しかし現実には、ここに先生と最後のお別れをするときが参りました。

伊木先生、安らかにおやすみ下さい。

伊木先生、さようならを申し上げます。

昭和四十五年十二月六日

三田史学会代表

清 水 潤 三

伊木寿一先生をしのびて

先生は明治十六年三月三日、山口県大津郡三隅村中村に尚義の長男として生を受けた。三隅村は萩市の西、約十五kmに位置するところである。伊木家は代々長州毛利家に仕え、先生のお話しでは三〇〇石のことでありその祖は戦国時代末に織田氏の流れをくむと伝えられ、愛知県犬山近くにある伊木山よりその名が起るといわれる。賤ヶ岳の七本槍は史上名高いが、同じく賤ヶ岳の三振大刀とよばれる一家が伊木家で、後、薩摩・備前・長州とわかれ、このうちの長州に移られ、毛利家に仕官された家が先生の生れられた家である。先生に古武士の風の有したのも故なしとしない。

明倫小学校、山口中学萩分校、山口高等学校を経て東京大学文科大学に進まれ、国史学の業を終えられたのは明治三十九年七月のことであった。大学時代には三上参次、田中義成、坪井九馬三、箕作元八、黒板勝美諸氏より教えをうけられ、歴史学以外ではケーベル博士や夏目漱石の講義をきかれたとうかづったことがある。いづれも歴史上の人物であるが、先生は生来の記憶力のよさで、我々にこれら諸大家の想い出を折りにふれて話されたこともあつた。

大学での同級生には西洋史に大類伸博士、国史学には安土桃山時代の研究をされた故花見朔巳氏、歴史学以外では心理学の野上俊夫博士（元京大教授）の諸氏の姿を見ることが出来る。

卒業後、直ちに史料編纂所（当時は史料編纂係）へ入られ、そこで優れた諸先輩から益をうけられつゝ、大日本史料、大日本古文書の編纂に従事された。当時の史料編纂所には三上、田中の両先生をはじめ、和田英松、黒板勝美、辻善之助、渡辺世祐、藤田明などのスタッフを有し、日露戦争の勝利の後とて、学問研究の機運の昂揚していた時代であつた。

先生は史料編纂所勤務の傍ら、四十一年よりは国学院大学へ、ついで四十四年より本塾文学部へ講師として出講され、古文書学、日本古代史、日本中世史を講述されたが、まもなく古代史と中世史は他へ譲られ、古文書学のみを終止一貫して今日に至るまで担当された。勿論、慶應義塾における古文書学の最初の担当者である。当時の史学科は在学生僅か二、三名、時としては一人も入学生のいないときもある少人数であったから、古文書学の授業も今日の百人を越すのとは大変趣きを異にしていた。先生はしばしば健康を損なわれ、東大での本務や本塾での授業も時には休みがちであったとのことであるが、六〇才を超えてからは比較的健康を保持され、恐らく九〇の坂も、更には御先祖の一人の記録である一一才にも迫る長寿をと祈っていたが、こゝに幽明境いを異にしたのはまことに悲しみに絶えないところである。

本塾での講義は昭和十九年前後に戦争盛んとなるや、一時中断されたことがあつたが、終戦と同時にふたゝび講壇に戻られ、大学で古文書学を、大学院で古文書学特殊講義を担当された。この間、明治末年より昭和初年にかけてその教えを

うけた人々には、卒業後本塾史学科の育成発展にあたられた、故間崎万里教授や現在もお元気であられる松本芳夫名誉教授、松本信広名誉教授、今宮新名誉教授、吉田小五郎先生、浅子勝二郎名誉教授をはじめ史学科卒業生の全部に及び、昭和廿年以後は国史専攻のすべての学生がその教えをうけた。

先生は昭和十八年停年退官に至るまで、東大史料編纂所に史料編纂官として勤務され、大日本史料第九編と大日本古文書中、相良家文書二巻、伊達家文書十巻をはじめとして幾多の優れた古文書集の校訂に当られた。他面、古文書学の学問体系の樹立に努力され今日も名著の誉れの高い日本古文書学を刊行されたのは昭和五年のことである。この書物は後、増補されて昭和十五年慶應義塾大学へ学位論文として提出され、文学博士の学位を得られたものである。今日に至るまで、もつとも要を得た、標準的な古文書学のテキストとして斯界で評価されてきたもので、古文書学、国史学にたずさわるもので本書の恩恵に浴さないものは少いといってよい。先生はこの他に岩波講座日本文学に「書状の変遷」昭和七年九月、岩波講座日本歴史に「日本書道の変遷」昭和十年二月、をそれぐ執筆され、本誌へも、「大内氏の文化」を第一巻三号と第二巻二号へ、「宸筆心経について」を第十四巻三号と四号へ載せられた。先生は本塾と東大のほかに、国学院大学、東北大学、立正大学、聖心女子大学、明治大学、東京都立大学などへも出講された。この間先生から古文書学の手ほどきを受けたものは枚挙にいとまのない程であろう。

先生の業績は古文書学上において不滅のものがあるが、その応用としての筆蹟鑑定にも当代一流の識見を示され、古くは大審院、控訴院、新しくは高等、地方の裁判所より、至難なる事件の鑑定を求められることしばしばであった。筆者の記憶に残っているものだけでも帝銀事件や鹿地亘事件での先生の判断があげられる。先生のこの方面での権威は同時に各地より古文書、古記録の鑑定の依頼の頻発となつたが、先生は御多忙にもかゝわらず親切に、それらの調査鑑定に当っていたことは晩年、特に親炙していた筆者にとっては記憶に新しいところである。逝去される一ヶ月前去る十一月一日に

御自宅で日親の曼荼羅壱巻を鑑定されたのが先生の数多い鑑定の最後となつてしまつた。

先生について記したいことは尽きないが、今は「文教院本実舍空居士」となられた先生の御冥福を謹んでおいのりして筆をおきたい。

（四十五年十一月二十九日夜 高橋正彦記）

伊木先生の想い出

昭和二九年秋の松江出雲大社方面への史学科研究旅行は、史学科先輩の故恒松安夫知事の配慮もあり、実りの多い且つ大変楽しい旅行の一つであつた。十月五日出雲大社の参拝見学を終えた後、学生達は日御碕神社に先行し、伊木先生と私は等数名は千家を訪問、茶菓の接待を受け暫時休息ののち車で日御碕神社に到着した時は、学生達が曾根研三氏及び神社の方の説明を受け、見学を終つたところであった。学生達は燈台等を見学後バスで宿舎に戻つたが、先生は同社の古文書は未見であるとの事で残られ、私も一緒に古文書を拝見した。

卷物仕立の古文書中袖判のある文書が出て来る度に、先生は自分に云い聞せる様に小声で、年代と書判を推定し、文書奥の日付を開かれ、確認される様に「うむ」と合点し乍ら実に楽し気に次々と文書を見て行かれる。他の研究旅行では窺えなかつた先生の一面に接して、頭の下る思いをした。

昭和二八年八月、犬塚顕君に誘われ、同君の郷里伊奈の御宅に数日御邪魔して、同君の案内で附近の史蹟等を見学し、駄駄駅近くの文永寺を訪れた際、住職の話に、昔住職等同志が郷土史研究を志した際、古文書が読めぬので、東京よりも可き先生を迎える事となつた。要請により来寺された教師は意外にも若年の先生であったので一同東京では田舎者と馬鹿にして此の様な若輩をよこしたのであらうから、ここは一つこの若輩を困らせて追返そうと相談が決まり、何処から読むのかさえ見当のつかない困難な文書を突つけた所、若輩先生床柱を背にゆうぜんと一字々々指示しながらすらくと読

聞せ女房奉書であることを説明されたので、一同先刻の軽蔑の念は尊敬の念に一変、以後熱心に指導を受けた。この偉大な若輩が伊木先生、したがつて貴方達は誠によい先生の指導を受けられて結構ですな、と丁重に茶菓を出してのもてなしを受け、嬉しいやら自らの不出来を恥るやら、感激するやら誠に複雑な気持で早々同寺を辞した。

同夜此の事を犬塚君が父君に話したのがきっかけで、父君は学生が先ず古文書に親しめる為に好適なら、所蔵の中馬文書を一括小生に土産として進呈しようという事になり、喜んで頂戴し、早速教材として使用する事とした。この文書のせいかどうかは断定し兼ねるが、この頃より古文書に興味を抱く学生諸君が増加し、昭和三年六月二十四日、立川奥の大悲願寺への古文書見学旅行を発会式とし、『慶應義塾古文書研究会』を発会することが出来た。先生は大変喜ばれ、会長として、以後機会ある毎に研究会の指導に当られた。

先生からは直接間接に多大の御厚情を受けた私が、ようやく先生に喜こんでいただけるほんのささやかな御恩返しは、この一つだけで申し訳ない事と悔みつゝ今は心から先生の御冥福を祈るのみである。

(河北展生)